連載コラム

国際交流員の活動日誌

vol.56

「昼間点灯運転」Lights On for Safety

晩秋になると、朝霧は多いと思います。伊達地方より、僕の故郷であるシアトル市の方が朝霧は多く、霧が深くなると運転が大変になります。しかし日本の霧深い朝の通勤の方が怖いです。なぜなら、前照灯を点けない車が多いのです。霧の中、前照灯を点けると他の車や自転車や歩行者に対して自分の車が見やすくなるので、米国では点灯運転が基本です。

僕は霧の中に入っても前照灯を操作することはありません。なぜなら時間に関係なく必ず点けているからです。15歳の時、地域の公立高校で受けた運転講習で教えてもらった事です。先生は「エンジンをかけて、すぐ前照灯を点けなさい。何時でも点灯のまま運転しなさい。安全だし、点けない理由はないのだから。」と言いました。昼間も点灯運転をする米国の習慣を日本人に説明しても、あまり通じないことが多いです。

現在の感染症の影響で、通常マスクを付けます。マスクは自分のためだけではなく、周りの方々を守るために付けます。昼間の点灯運転も同じです。自分の周りが見えるようにではなく周りの方々が自分の車が見えるように、事故に遭わないように点けるのです。これから昼間が短くなり、天気によってはさらに暗くなるので、点灯を忘れずに安全に運転をしましょう！

地域の魅力

ふる里再発見

企画展「冨田洋々亭（ようようてい）と狂歌」③
～梁川・五十澤連（いさざわれん）の活動～

企画展
冨田洋々亭と狂歌
12/26㊐まで開催
保原歴史文化資料館

狂歌では「連」と呼ばれる同好者の集団を作ります。その活動はどのようなものだったのでしょうか。

代表的な活動として、作品募集、成績優秀者をまとめた「番付」の出版や、浮世絵師が描く姿絵も載った作品集の出版があります。

また、諸国から歌を募り江戸の判者（狂歌の優劣を判定する人）に撰を依頼して狂歌碑を建立したり、広く募った歌を社寺に献額するなどの活動もしていました。このような幅広い活動をすることができた背景には、当時の伊達地方が養蚕先進地として経済的な豊かさを持ち、交通に恵まれていたこと、書画に堪能な人物がいたことがあげられます。同時に、狂歌に対する豊かな気風や情熱があったことがうかがえます。

梁川の五十沢地区は狂歌が盛んで、同好者の集団である「五十澤連（いさざわれん）」を結成していました。

天保3（1832）年に森紅亭秋人（本名：宍戸喜左衛門）が催主となり建立した狂歌碑「五十澤八景」があります。五十沢の熊野八幡神社鳥居近くに建碑され、現在も残っています。

表面は苔むして文字の判読が難しくなっていますが、建碑の由来と八景の歌24首が刻まれています。刻まれた狂歌は、現在の佐賀県・島根県・香川県・三重県・愛知県・長野県・神奈川県・東京都など、さまざまな地域の狂歌師たちが五十沢を詠んだものです。

現在、感染症予防のため外に出る機会が少なくなっていますが、市内の歌碑や記念碑を巡って、地元の歴史を見直してみるのはいかがですか。

五十澤八景の歌碑